

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 7日現在

機関番号：32685

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720063

研究課題名（和文）『本朝孝子伝』研究 ——「孝」から見た近世前期文学の再検討

研究課題名（英文）The research of "Honcho koushi den" —restudying the literature of early Edo period from the sight of "kou"

研究代表者

勝又 基 ((KATSUMATA MOTOI))

明星大学・人文学部・日本文化学科

研究者番号：00409553

研究成果の概要（和文）：

藤井懶齋『本朝孝子伝』（貞享2年〈1685〉刊）について、4つの成果を得た。

(A) 該書が日本の古典からどのような人物を代表的孝子として選んだかを明らかにし、口頭発表を行った。

(B) 作者・藤井懶齋の伝記について年譜形式の論文を発表し、その生涯の全てについて1年単位で具体的に明らかにした。

(C) 該書全編に注釈作業を終えた（発表には至っていない）。

(D) 大名と孝子伝との関係について、全国に目を配り、とくに松平忠房（福知山藩→島原藩）、保科正之（山形藩→会津藩）に注目して論文を発表した。

研究成果の概要（英文）：

Four results were obtained about the Fujii Ransai "Honcho koushi den" (published in 1685).

(A) Made it clearly what kind of person this writing chose from the classic of Japan as typical koushis, and made a Society announcement.

(B) The paper of biographical sketch form was announced about the biography of the author Fujii Ransai, and it clarified concretely per year about all the whole life.

(C) Notes work was finished in this writing whole volume (it has not resulted in the announcement).

(D) About the relation between a daimyo and the koushi intermediary, I surveyed all over the country and the paper was especially announced paying attention to Tadafusa Matsudaira (Fukuchiyama han -> Shimabara han) and Masayuki Hoshina (Yamagata han -> Aizu han).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：孝・日本近世文学・孝子伝・孝子表彰

1. 研究開始当初の背景

「孝」という江戸時代の思想・文芸にとつての重要課題を扱った資料である『本朝孝子伝』は今後様々な面からの検討が必要となるはずの書物である。しかしその研究は数少なく、基礎的なテキスト整備さえも整っていないような手つかずの状態であり、早急に行う必要がある。

勝又は、『本朝孝子伝』について、2つの面から研究を行ってきた。1つは詳細な諸本研究から出版に関する意識を明らかにした。2つめは該書のうち当代に生きている孝子を扱った「今世部」収録の20名を検討し、孝子表彰の実態と孝子説話の成り立ちについて研究してきた。

残りの視点として残されているのは『本朝孝子伝』と古典との関わりである。これらを明らかにした上で、該書の注釈作業と著者・藤井懶斎の詳細な伝記研究を完成させる。これをもって学界に便宜を供すると共に、拙論の可否を問いたい。

2. 研究の目的

本研究は4つの大きな柱から成る。

(A)『本朝孝子伝』における仏教批判と古典の再評価についての考察。

近世前期には出版文化の普及によって、和漢の古典テキストが誰にでも読めるようになった。これに伴い、近世の目から見た古典の再評価が行われるようになる。『本朝孝子伝』全5部のうち「天子部」「公卿部」「士庶部」「婦女部」も、史書や軍記などから孝子を拾い上げて論評している。

どのような事跡をもって歴史上の人物を孝子と見なすのか。その取捨選択を通じて、おのずと「孝」という視点からの歴史再編が行われる事となる。本研究では、『本朝孝子伝』の各章に記された伝記や論評を、出典となった作品と詳細に比較検討する。この検討を通じて、近世に入って新たにクローズアップされるようになった「孝」という儒教思想によって、古典の人物をどのように再評価しているのかを跡づける。

(B) 著者・藤井懶斎の伝記研究。

近世前期の儒学研究では、伊東仁斎など、現代においても高い思想性が認められるような儒学者が高く評価されてきた。一方、『本朝孝子伝』など教訓書を多く刊行した藤井懶斎のような存在は、「俗儒」としてほとんど顧みてこられなかった。

しかし申請者は、元禄時代の儒学者がいかなる達成をみたかよりも、彼らの学問スタンスがどうであったかに着目する。儒学者にとって教訓書を著すとは、そして刊行するとは

どういう意味を持つ行為だったのか。そうした問題を考える上で、藤井懶斎の生涯を明らかにする事は極めて重要だと考えている。

(C)『本朝孝子伝』テキスト整備と注釈。

『本朝孝子伝』(全7冊71話、漢文表記)は、作品の重要性こそ早くより認められているながら、適切なテキストが提供されて来なかった書物である。唯一の活字本『日本教育文庫 孝義篇』(明治43年 同文館)は、原本に存した振り仮名・送り仮名が省略されているため、かえって原本よりも読みにくい活字本となってしまう。

そこで、『本朝孝子伝』の最善本の写真版に、書き下し文と試注を付した形でのテキストを4年間かけて完成させ、学界に提供する。このことは、近世文学、近世史学を始めとして、近世文化を考えようとする多方面へと多大な便宜をもたらすだろう。また、今まで『本朝孝子伝』に関して発表してきた拙稿の可否を問うためにも、重要な作業だと考えている。

(D)【発展研究】大名と孝子伝との関わり

近世において孝子表彰を行うのは、多くが大名である。彼らがどのような意識で孝子表彰を行ったか、そしてそれをどのように孝子伝として執筆した(させた)かという姿勢は、藩によって様々である。よって各藩の資料を集め、それぞれを具体的に跡づけて行く必要がある。

3. 研究の方法

本研究の基本作業は、『本朝孝子伝』の校訂・注釈と、著者・藤井懶斎の伝記調査である。

(A)『本朝孝子伝』の古典を扱う章段の特色について、他の孝子伝と比較を行う。

『本朝孝子伝』各章には出典となる古典が明記されているので、これを手がかりに該当箇所を探し出して『本朝孝子伝』と比較する。ただしその比較テキストは鎌倉期の写本などではなく、できるかぎり著者が手にしたテキストに近い近世の版本を使用する予定である。

また、江戸時代前期には『日本古今人物志』や『本朝列女伝』など、多くの人物伝が刊行されている。作者が原典に直接拠るだけでなく、これらを参考にした場合も考えられるので、こうした作品群のチェックも行う。

(B) 執筆中の年譜を完成させる。

●懶斎の寛文9(1670)～延宝6年(1678)(53～62歳)までの伝記

久留米藩医を辞めて故郷の京都に戻り、処

女作『蔵笥百首』を刊行するまでである。これを論文「藤井懶斎年譜稿(3)」として発表する。

彼は久留米藩を去る際に筑後地方の地誌『北筑雑藁』を執筆しているため、そこに記された場所を現地調査して藤井懶斎の足取りをたどる。

また、京都に戻ってからの彼の居住地にはいまだ未確定の部分が多いため、京都市内の現地調査を行って明確な答えを得る。また大阪大学は藤井懶斎の著書『北筑雑藁』の数少ない一本を所蔵するので、足を伸ばして該書の書誌調査も行う。

●懶斎の延宝7～貞享4(63～71歳)までの伝記

この時期は『本朝孝子伝』『国朝諫諍録』など、代表的な著書を矢継ぎ早に刊行する時期である。

彼の著書に関する諸本調査はある程度済ませているが、京都大学と神宮文庫にしか残されていない『徒然草摘義』のうち、神宮文庫本が未見である。訪問して書誌調査を行う。

また、高知県立図書館山内家宝文庫には藤井懶斎の著書が多数蔵されている。また同館蔵『泰山日』に藤井懶斎の墓碑に関する資料が載るとの報告があるので、これも訪問して報告する。

●懶斎の元禄元～宝永6年(72～93歳)までの伝記

この時期は藤井懶斎が元禄記京都朱子学の重鎮として、さまざまな人物と交流を行った時期である。

この時期に注目されるのが、阿波藩の儒者・増田立軒である。彼はこの頃から藤井懶斎と面識を持ち、彼の業績を広めんと務めた。立軒の資料は徳島県立図書館に多く蔵されており、藤井懶斎に関する情報も少なからず残されていることが予想される。

また、藤井懶斎は元禄末年、多久聖廟(佐賀県多久市)の創建に携わっている。多久聖廟には藤井懶斎作の文章「多久邑主説」ほか、多数の藤井懶斎資料が残されているのでそれらも調査する。

(C) 全文の注釈作業を行う。

『本朝孝子伝』の表記は漢文である。本研究では該書全篇の書き下し文を作成し、注釈を付す。

『本朝孝子伝』の各章は、①孝子の伝記を記す「伝」、②孝子に対する漢詩「賛」、③孝子や孝一般に関する意見を記す「論」の3部構成となっている。とくに「論」の部分は経書や中国故事を多彩に引用しているため、注釈作業にあたっては辞書だけでなく漢籍を広く博捜しなければならない。

(D) 各地の大名における孝子表彰と孝子伝

との関わりについて個別に調査する。実際に県立図書館、資料館、等を訪ねて地方史研究や地方において整備された資料を調査し、資料にもとづいた考察を行う。

4. 研究成果

平成20年度

近世前期最大の孝子説話集『本朝孝子伝』(藤井懶斎編・貞享2年(1685)刊)全5部のうち、「天子」部「公卿」部の書き下し文作成と注釈作業とに取りかかり、作業を終えた。完成年度での全篇注釈完成へ向けて、年次計画通りの作業を遂行できた事になる。

また、『本朝孝子伝』の著者・藤井懶斎の伝記のうち、延宝5年(1677)から貞享4年(1687)までの事跡を明らかにし、論文「藤井懶斎年譜稿(三)——延宝五年から貞享四年まで」(「明星大学研究紀要 日本文化学部・言語文化学科」第17号)として発表した。これにより、藤井懶斎が著作を最も旺盛に刊行した時期の事跡を具体的に明らかにする事ができた。特に、藤井懶斎の著書刊行意識を明らかにできた事は収穫であった。

また上記の作業を通じて、「大名と孝子伝」という新たな発展的研究テーマを見い出すに至った。比較文化国際会議における口頭発表と論文「日本近世における孝子表彰の発生——孝子説話研究のために」、日本文学協会における口頭発表「近世孝子伝のはじまり」はその成果である。

平成21年度

昨年度に引き続き、『本朝孝子伝』全5部のうち、「士庶」部の書き下し文作成と注釈作業とに取りかかり、作業を終えた。完成年度での全編注釈完成へ向けて、年次計画通りの作業を遂行できた事になる。

並行して、続く「今世」部や仮名版『仮名本朝孝子伝』独自の章段についても調査を行っている。「今世」部に掲載される中江藤樹に関する説話伝播の諸相を「講談『中江藤樹』の成立」として公表した。また『仮名本朝孝子伝』「追加」部「対馬太田氏」については対馬市立つしま図書館への研究出張を行った。その結果、藩の記録『天竜院公実録』に詳細な記録を見出し、太田氏の具体的な居住地も明らかになった。今後の注釈に反映させたい。

もう1つの柱である藤井懶斎の伝記研究については、引き続き作業を行ったが、その著書『大和為善録』の諸本関係が複雑かつ重要である事に気づかされた。そのために諸本調査を改めて行う事になり、本年度の論文公

表には至らなかった。年譜完結に向けて来年度以降を期したい。

また昨年度より始めた発展研究テーマ「大名と孝子伝」については、『本朝孝子伝』に多く登場する福知山・島原藩主松平忠房について整理し直し、論文「松平忠房の孝子伝」を公表した。

平成22年度

本年度は (B) と (D) での業績があった。

(B) 藤井懶斎の伝記研究は、72歳から81歳までを「藤井懶斎年譜稿(四)」として発表した。彼の年譜連載は今年度で完結する予定であったが、新資料の出現などにより記載内容が増えたため、予定を変更して来年度完結を目指すこととした。

また、(D) として行ってきた「大名と孝子伝」というテーマについては、会津藩主・保科正之が行った偽キリシタン兄弟の表彰を「偽キリシタン伝の流転」としてまとめ、発表した。また江戸時代の教訓書出版の問題は考えておかねばならない問題であるため、「近世前期における仮名教訓書の執筆・出版と女性」を発表した。

(A) については来年度の発表を予定している。(C) については「婦女」部までの注釈を終え、あとは最終部「今世」部を残すのみとなった。

平成23年度

本年度は (A) 『本朝孝子伝』における仏教批判と古典の再評価に関する考察および (B) 『本朝孝子伝』の作者・藤井懶斎の伝記研究での業績があった。

(A) 『本朝孝子伝』における仏教批判と古典の再評価に関する考察では、『本朝孝子伝』の古典を扱う章段の特色について、他の孝子伝と比較を行い、その成果として学会発表「日本における代表的孝子の形成」(2011.10.1 日本近世文学学会)を行った。

(B) 藤井懶斎の伝記研究は、82歳から没するまでを「藤井懶斎年譜稿(五)」として発表した。今回も彼についての新出書簡など、新見を多く盛り込んでいる。これで5回に渡る連載を終わり、彼の生涯のすべてに渡る調査を完遂した。

(C) については最終部「今世」部の調査を終え、『本朝孝子伝』全編の註釈作業を終えた。ただしまた雑誌発表は行っていない。今後学術雑誌へ連載の形で掲載して大方の批正を乞い、いずれは著書の形で公にできればと考えている。

(A) [学会発表] ⑧

(B) [雑誌論文] ①⑥⑧

(C) 発表には至っていないが、全章段の註釈を終えた。

(D) [雑誌論文] ②③⑦ [学会発表] ①②③④⑥⑦

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

①勝又基「藤井懶斎年譜稿(三)」(『明星大学研究紀要』2009 91-100)

②勝又基「日本近世における孝子表彰の発生」(『東アジア比較文化研究』2009 85-95)

③勝又基「松平忠房の孝子伝——漢文孝子伝の役割と展開」(『近世文芸』91 2010 30-43)

④勝又基「講談「中江藤樹」の変容」(『講談と評弾』2010 19-35)

⑤勝又基「近世前期における仮名教訓書の執筆・出版と女性」(『民衆史研究』79 2010 1-11)

⑥勝又基「藤井懶斎年譜稿(四)」(『明星大学研究紀要』2011 41-53)

⑦勝又基「偽キリシタン兄弟事件の流転」(『金沢大学国語国文』36 2011 48-58)

⑧勝又基「藤井懶斎年譜稿(五)」(『明星大学研究紀要』2012 41-55)

[学会発表] (計8件)

①勝又基「日本近世の孝子説話における表彰の役割」(2008.6.14 東アジア比較文化国際会議)

②勝又基「近世孝子伝のはじまり」(2008.6.29 日本文学協会研究発表大会)

③勝又基「『本朝孝子伝』と『古今犬著聞集』」(2009.10.3 金沢大学国語国文学会)

④勝又基「高山彦九郎と若狭の孝子」(2010.8.28 北陸古典研究会)

⑤勝又基「講談の中の孝子伝に見る中江藤樹」(2010.9.25 中江藤樹心のセミナー)

⑥勝又基「高山彦九郎と新島の孝子」(2010.10.2 金沢大学国語国文学会)

⑦勝又基「高山彦九郎と孝子伝」(2010.12.23 九州近世文学研究会)

⑧勝又基「日本における代表的孝子の形成」(2011.10.1 日本近世文学学会)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

勝又 基 (KATSUMATA MOTOI)

明星大学・人文学部・准教授

研究者番号：00409553

以上